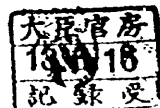


副官

社會記事資料（其ノ一一二）

六一一五 后

海軍軍事普及部



海の荒鷲生還手記

不時着機と戎克群との交戦

去る四月十三日我が海軍航空隊が廣東方面、天河、白雲、從化飛行場等を空襲、其の格納庫、倉庫、滑走路等を爆破し、敵に多大の損害を與へ、尙この日事變開始以來最初の敵「グロスター・グラヂエター」型二十數機と相見えて、壯烈なる空中戦を演じ、その十五機を確實に撃墜したことは既報の通りであるが、左記は當日廣東上空に於て敵地上砲火を受けて機關に故障を生じ、珠江の江口に不時着した我が一機が群がる戎克の包圍攻撃に遭ひ、之と惡戦苦闘遂に奇蹟的生還を遂げた時の搭乗員手記であつて當時の凄慘なる光景を眼前に彷彿たらしむると共に、一面平和的假面を裝へる支那沿岸戎克竝に漁船群の非道振りを暴露し、又所謂無防備都市廣東

防空陣の鐵壁を如實に物語るものであるといへやう。

奇蹟的生還記

海軍三等航空兵曹 田中 富彦

一等航空兵 勝見 一

四月十三日廣東空襲の命を受けた我が空襲部隊は、西原（晃）大尉指揮の下に、〇〇機〇〇機を以て、敵G型戦闘機隊の根據地と聞ゆる白雲、天河飛行場を衝いて、地上に屯するものは之を空爆粉碎し、天翔るものは之を悉く撃墜して、一舉に敵を殲滅してくれやうと勇躍〇〇を發進した。爽かな初夏の空は一碧玲瓏、大地は新緑に輝き、愛機を包む南海四月の大氣は珍らしくも清澄爽快、今日こそは眞に絶好の空襲日和だ。大型爆弾をシツカと抱いた各機は機翼を連ねて猛鷲の羽搏き物凄く一路快翔を續けた。

がて廣東上空に達すると、例の通り市の内外到る所から物凄、防空砲火が一齊に開かれ、高角砲弾炸裂に依る爆煙が恰も幕を引くやうに絶間なく前程に立籠る。

ダン！ダン！ダン！と直ぐ機の側で炸裂して火を吐く砲弾。

シュツ！シュツ！と頬を掠めて飛び散る弾片。

この彈幕を突破しつゝ、獲物を求めて暴進する我が機隊。

街の東北方に目指す天河飛行場が見える。而も大型格納庫が三棟最後の運命を待つてゐるかのやうに悄然と立つてゐる。

忽ち指揮官から「爆撃開始」の命令が下つた。得たりと機首をグツと下げ、急降下！照準器を通して見ゆるは唯目標のみ。他には何物も見えなければ隠えもしない。我が命にかけたこの一發！

一念無雜のこの境地こそは正に那須與市扇の的の場面に等しい。

「用打テ」投下把柄を無心に引いた。その刹那爆弾は愛機を離れた。

我等の砲の乗移つた爆弾は、見事弾道を齎して目標に命中、サツト閃く炸裂の閃火、轟然たる一大爆音と共にモクモクと湧上る爆煙、屋根が飛ぶ、人が舞上る、忽ち見る紅蓮の焰！

思はず「萬歳」と叫べば、僚友も莞爾として之に應へる。

この時サツト腦裏に閃いたものは、今日出發に際して「成功を祈る」と言はれたあの〇〇部隊長のお顔！

そして「やりました」と答へ得る嬉しさである。

だが、この嬉しさ。この任務を全うし得た場合にのみ味ひ得る尊き法悦に浸らんとした其の瞬間、その刹那であつた。

「ダン！ダン！ダン！」と愛機は續けさまに猛烈な敵弾を受けた。

「パーティーツ、パーティーツ！」と「エンジン」は黒煙を吐くと共に、操縦席

方の硝子板も飛行眼鏡も眞黒に塗りつぶされてしまった。「エンジン」からの油の噴出らしい。物凄いい震動と共に愛機は断雲の間を右に大きく旋回してグツと機首を下げて眞逆様となった。

「小癪な敵奴やりおつたな」と思ふ間にも、機は既に墜落状態而も操縦不能に陥ってしまった。物凄いい加速で廣東の街へ落ちて行く。噴き出す油は胴體に尾部に、さては焼けたガスと共に操縦席を包み、呼吸すらも困難だ。

だが調べて見ると操縦装置は大丈夫だ。苦心の末やっと愛機の旋回が止つて墜落状態を脱することが出来た。

「エンジン」も喘ぎ乍らではあるが回つてゐる。

占めた！ と徐々に高度をとつたが、見渡したところ指揮官機も僚機も見えない。これから豫定集合地點へ行くことなどは思ひも寄らない。

ふと「自爆」といふことが腹に閃いたが、早まつてはならぬと我と我心を
勵まし、〇〇に歸る覺悟を決めて針路を南にとつた。

暫くすると真下に海が見えた。珠江の口に出たのだ。だがこの時突如「ブ
ロペラ！」がハタと停つた。

もはや萬事休す。高度は五〇〇米―三〇〇―二〇〇とグングン下る。機側
から海面が見えるやうになつた。もうかうなつては敵前不時着あるのみだ
勝見一空は悲壯なる決心を面に現して最後の通信とばかり無電のキイを握
つた。

「用意はいゝか」「宜しい」

ザ、ザ、ザ、と前車輪が水を切る軽い「シヨツク」で愛機は機首を海中に
突込んだ。

落付きが第一だ。上下が分らぬ狼狽は禁物、「バンド」を脱つてボカリ海

面に浮き上つた。深呼吸をする。僚友も微傷も負はず浮いてゐる。愛機は後部上方を水面に出して突立つてゐる。

こゝは海上だとはいへ敵前である。

「機銃を卸せ、弾倉を外せ」と先づ戦闘の準備おさおさ怠りなく、次いで救命筏を取出して空気を入れ、愛機沈没後の處置をした。後は唯天命を待つばかりである。時に零時四十分。

やがて遙か陸岸近くに蝟集してゐた戎克が次々に帆を上げて徐々に動き出した。何れも我方に次第に接近して来る。そして五十米位離れた所まで来て停止したものもあり、其の邊を往復してゐるものもあり、どうやらこちらの様子を探つてゐるやうであつた。愛機の上で二人は萬一に備へて應戦の用意をしてゐた。

こちらでは警戒はし乍らも、相手は漁民だし、何か魚でもとつてゐるのだらうと思つてゐると、間もなく猛烈に機關銃を打出した。

さては武装「ジャンク」であつたのか、愛機の二、三米前方に盛に水煙が立つ、ビューンビューンと頭上を掠め、愛機の胴體をブスブス貫く弾もある。

「何を生意氣な「ジャンク」奴」と、怒髪天を衝き、さあ来いと應戦したが何一つ蔭蔽物のない波上、愛機は波に揺られて足場が悪く、ともすれば二人は海中に落ちそうになる、機銃は重くて照準が出来ない。

「え、ま、よ」と身を敵弾に曝し乍ら、自分の肩に銃身を擔いで照準を助け、勝見一空兵が引金を引く。

ダ、と快い震動と共に銃口は火を吐き、赤い曳痕弾は憎い「ジャンク」の胴體に吸込まれるやうに命中する。パタリ、パタリと瞬く間に六、七名を倒した。敵は思はぬ猛撃に驚いたらしく、忽ち逃走した。

艦隊の「キヤンキー」一奴。息ひ知つたかと思はれ、一空と顔見合して破顔一笑した。この交戦で愛機は胴體に八弾を被つた。

だが一旦退却した「ジヤンク」群は又々敷を倍加して今度は四十數隻が包圍隊形をとつて三方から進んで來た。

戦さは機先を制するに如かずと、今度はこちらから打出した。「ジヤンク」群右側の指揮船らしいのが、先端に小さな吹流しのやうなものを附けた棒を左右に振つて合圖をすると、忽ち三方の船群から亂射亂撃を開始した。水煙は無數に立ち、飛行機は數十發の敵弾を浴びて蜂の巢のやうになり、尾部は見る見る中に粉碎されて了つた。

かうなると人間は却つて落付いて來る。こちらも前回の戦法で射つて、射つて、射ちまくつた。銃身が焼けて手で握れなくなり、襦袢を海水に浸して銃身を冷やし乍ら應戦を續けた。だが残弾はもはや残り少なくなつた。この交戦で弾を射ち盡したら最後だ。二三發宛に儉約して發射しなければ

ならぬ。しかし二人共決してひるんではゐない。幸にことには、天佑か、神助か、それとも敵の射撃がよくよく下手なのか、身邊を掠める無数の敵弾も一發も命中しない。この間こちらは相當に敵を倒してゐる。

この時不思議にも西方に當つて、なつかしい飛行機の爆音が聞えて來た。遙かに勇ましい我が〇〇機四機が北上するのが見えた。

この飛行機の爆音が聞えて來ると、彼等は餘程恐ろしいと見えて、忽ち「ジャンク」群は四散してしまつた。

二人は初めて我にかへると急に睡氣を催して來た。

だが今眠れば最後だとお互に勵まし合ひつゝ、大きな聲を張上げて軍歌を歌つたが、それも聲がかれて長くは續かなかつた。

もう不時着してから三時間になる。九分通り救助されることも絶望だと思ふと、一層のことあの時自爆すればよかつたと、今度こそはいよいよ覺悟を固めた。今退却した「ジャンク」共が更に兵力を増して來襲することは

必定。

「ヨーシュー」その時射つて、射つて射ちまくつて、最後の一發と度に潔く南海の藻屑と消えやう。

二人は悲壯なる決意をして邊りを片付け、重要書類を處分し、敵弾で裂けた愛機の胴體を破つて中に遁入り今迄の經過をあらまし書綴り、最後に天皇陛下萬歳と連名で書記した。

もう何も思ひ残すことはない。死して護國の鬼となるは我々の本望だ。そして再び生れ變つて敵を討たう。

「もう四時過だが、あと一時間待つことにしやう。五時迄が我々の生涯だ」と二人は相談した

俄然海のさ中に唯二人きりの靜寂を破つて飛行機の爆音が聞えて來た。

音は段々大きくなる。

あゝ、なつかしい我が僚機だ。

忽ち頭上に來て一旋回、二旋回、機上から僚友が手を振つてゐるではないか、

次いで見事に着水して我々に近づいて來る。翼端に搭乗員が出て來た。あゝなつかしい我が空の勇士よ、日の丸の翼よ、二人は直ぐ何よりも先づ機銃を抱いて浮舟を傳はり救助機上に遁上つた。

機上米原大尉と青木一空曹の日焼けした童顔に迎へられた時、思はず熱い涙が我等二人の頬を傳つて流れた。

水を蹴立て、飛行機は滑水を始めた。だが愛機は未だ浮いてゐる。この儘ではむざむざ敵手に渡るからどうしても沈めなければならぬ。米原機は滑走中我が愛機に機銃の猛撃を浴びせた。

見る見る愛機の胴體は裂けて沈んで行つた

あゝ愛機よ、さらば、これまで生死を共にした愛機よ、さらば、二人は沈痛な感激に打たれつゝ、沈みゆく愛機を見守つた。

やがて米原嶽は離水して○○に向かった。

かくて我等は○○から月明の洋上を驅逐艦○○に便乗して無事○○に帰還
することが出来た。

思へば今日の半日は全く夢のやうな氣がする。

人間は運命に依つて左右されるのだ。だがその運命を開拓して行くのは一
つに精神力だ。

今日奇蹟にも生還し得たことは、尙我々にこの世で爲さねばならぬ重大な
任務が残されてゐるからである。

ヨシ！さらば今日得た數々の得難き教訓を活用していよいよ一死奉公を誓
ひ、命のあらん限り勇戦奮闘しよう。

(終)

官氏名 西原 晃 大尉

原籍 山口縣宇部市大字中宇部一―番地ノ第三

現住所 水戸市沖町

生年月日 明治四十三年一月十五日

入校(入團) 昭和二年四月八日

現官任用 昭和十一年十二月一日

父房太郎、母イヨ、姉フミヨ、妹サツキ

妻喜久代 昭和十二年九月十四日婚 子供ナシ

官氏名 三空曹 田中 寅彦

原籍 熊本縣王名郡神尾村大字大田黒千五百七十二番地

生年月日 大正五年二月十六日

入校(入團) 昭和八年五月一日

現官任用 海軍三等航空兵曹(昭和十二年十一月一日)

父直喜、母オリヨ、妹フキ、弟立身、楯男

官氏名	米原綱明大尉
原籍	山口縣佐波郡右田村六字上右田一八九
現住所	本籍ニ同ジ
生年月日	明治四十三年二月十一日
入校(入團)	昭和二年四月八日
現官任用	昭和十一年十二月一日

父乙彦、母アサ、弟正明、三郎、妹春江、弟道正
妻ナシ

官氏名 一空曹 勝見 一

原籍 佐賀縣唐津市大字唐津五百六拾六番地

生年月日 大正七年七月二十四日

入校(入團) 昭和九年六月一日

現官任用 海軍三等航空兵曹(昭和十三年五月一日)

父弘秀、妹種子、妹浩子

官氏名 一空曹 青木 清衛 (應召兵)
入團 大正十二年六月一日